

能楽が元曲の影響を受けたとする説について

蒲生 郷昭(東京文化財研究所名誉研究員)

日本の能楽は元代中国の総合舞台芸術「元曲(雜劇)」の影響を受けた、とする説が唱えられたことがある。今日では完全に否定されているが、能楽史ないし日中文化交流研究史のひとつまでであった。発表では、その説の発生から終焉までの経過をたどる。

このことを最初に主張したのは、おそらく江戸時代中期の儒学者であり政治家でもあった新井白石である。1706 年成立と考えられるその著『俳優考』において、元代のころ盛んだった日中相互の人的交流のなかで、田楽や猿楽の人たちが元曲にならって作詞し演技した、猿楽も元曲の形になったものである、という見解を示した。やはり儒学者だった荻生徂徠や太宰春台も、同様のことを述べている。

近代になって、重野安繹と小中村清矩が、それぞれにこの説の存在を指摘した。重野が消極的に否定したのに対して、小中村は『俳優考』のその部分を引用するのみで肯定も否定もしていない。1904 年に発足した能楽文学研究会は、課題の第2として「比較研究」を設定し、そこに示した7項目の筆頭が「元劇支那雜劇との比較」だった。以後、肯定または否定の立場から、何人かの人がこの問題をめぐって発言することになる。

最初に本格的に否定したのは津田左右吉で、1911 年のことだった。能楽が元曲の影響を受けたことを示す証拠は存在しないという主張で、高野辰之がそれにつづく。ほかにも、その説の存在に言及さえしない、という態度によって、間接的に否定した人があった。代表は能勢朝次であり、1938 年の『能楽源流考』で元曲影響説を完全に無視したのである。その後も、両者の関係を肯定する見解が見られたいっぽうで、能勢と同じ態度をとる後継者も少なくなく、1960 年ごろには能楽の分野では、その説はほぼ完全に姿を消す。けれども音楽学分野では、なおしばらくはその余韻が残った。